

この世の困難

よみがえりに基づく信仰生活の必要性

2006. 9. 19 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

ローマ人への手紙 4章17節から21節

このことは、彼が信じた神、すなわち死者を生きし、無いものを有るもののようにお呼びになる方の御前で、そうなのです。彼は望みえないときに望みを抱いて信じました。それは、「あなたの子孫はこのようになる。」と言われていたとおりに、彼があらゆる国の人々の父となるためでした。アブラハムは、およそ百歳になって、自分のからだが生かされたも同然であることと、サラの胎の死んでいることとを認めても、その信仰は弱りませんでした。彼は、不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず、反対に、信仰がますます強くなって、神に栄光を帰し、神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。

ヘブル人への手紙 11章8節から12節

信仰によって、アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかを知らないで、出て行きました。信仰によって、彼は約束された地に他国人のようにして住み、同じ約束をともに相続するイサクやヤコブとともに天幕生活をしました。彼は、堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都を設計し建設されたのは神です。信仰によって、サラも、すでにその年を過ぎた身であるのに、子を宿す力を与えられました。彼女は約束してくださった方を真実な方と考えたからです。そこで、ひとりの、しかも死んでも同様のアブラハムから、天の星のように、また海べの数えきれない砂のように数多い子孫が生まれたのです。

先日引き続き、同じテーマについて一緒に考えたいと思います。『この世の困難』についてです。「この世の困難に対する主の答え」について。

今日はおもに、「よみがえりに基づく信仰生活の必要性」について、ともに考えたいと思います。

イエス様を通して、初めて内容ある人生とはっきりとした目的を持った意味のある人生とが確立されます。イエス様のみもとに来るということは、救われることを意味します。聖書に、「主のもとに来る人は必ず受け入れられる」と書かれています。それは、だれでも経験したのではないかと思います。即ち最初は、私たちが何を手に入れることができるかということに重点が置かれます。例えば、「罪の赦し」、「まことの心の平安」、「真の喜びと生き生きとした希望」などです。

けれど、事態はそれから更に成長しなければなりません。というのは、いつまでも元の状態に留まることは許されないからです。即ち、主イエス様を通して私たちがいただいたいのちは確かに素晴らしいのちですが、更に私たちは成長しなければなりません。

まず第一に、「主イエス様を知ること」。

そして次に、「イエス様とともに歩むこと」が必要です。

今話しましたように、「よみがえりに基づく信仰生活」こそが、大切なのです。

そのような生活を送ったのは、アブラハムです。今、司会の兄弟が二箇所お読みになりました、アブラハムは何を経験したのか、どうして祝福されたのか、用いられるようになったかについての箇所です。

このアブラハムは、私たち信者すべての者の父、即ち、信仰者の模範とされています。アブラハムの生活を通して、私たちは次のことを知ることができます。

私たちの信仰生活にとって最も大切なことは、死者をよみがえらせた方、つまり「よみがえりの主との交わり」を持つことです。信じる者は、単によみがえりの事実を信じるだけではなく、「よみがえりに基づいた生活」を送ることが必要なのです。

これはいったいどういうことを意味しているのでしょうか。

それは、いろいろな状況や環境に動かされることなく、それらを超越した生活をするということにほかなりません。ちょうど、イエス様が復活なさって父の御座に座するようになられたと同じように、私たちもまた、本当のいのちを持っていれば、イエス様とともによみがえり、すでに天に移されているはずで。

よみがえりに至るイエス様は、十字架を通過して歩いていかれました。私たちの場合も、それと全く同じです。私たちも「自己を否定」し、自我に死ねば、よみがえりに基づいた生活を送ることができるのです。

では私たちは、よみがえられた主との交わりを持っているのでしょうか。

持っていないならば、それは私たち自身の責任です。なぜなら、自分勝手な道に行ったことの結果であるからです。私たちは悪魔のせいとか、周囲の事情とか、ほかの人たちのせいにしがちですけれど、根本問題は、「自分の自我」にあることを知らなければなりません。

パウロの祝福された奉仕活動は、刑務所に入れられることによって一度中断されました。しかし、彼は、

エペソ人への手紙 2章6節

キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。

と書くことができたのです。

どのような困難があろうとも、そのような困難を超越して勝利者となることができます。私たちがよみがえりに基づいた信仰生活を送るとき、その戦いの勝利は保証されています。

五旬節ののち、イエス様の弟子たちは迫害され、憎まれました。しかし、あらゆる攻撃に対して、彼らは圧倒的な勝利者になることができたのです。

私たちがよみがえりに基づいた信仰生活をするものの必要性に対して、主によって目を開いていただきたいものです。

ここでもう一度、「よみがえりに基づいた信仰生活」とは、いったい何を意味しているのかを、少し考えてみたいと思います。

そのために、私たちはもう少し詳しく、アブラハムの生涯を見てみることにしましょう。なぜならば、アブラハムは、死者を復活させる神を信じた人だったからです。

アブラハムの生涯のおもな特徴は、次の三つにまとめられます。

第一番目、主に対する全き拠り頼み。

第二番目、主の拒絶的な答えに対する了解。

第三番目、絶えず続く新しい成長。

1. 「主に対する全き拠り頼み」について、聖書から見てみましょう。

全てのことに於いて、アブラハムは主に拠り頼みました。なぜなら、自分自身は何も出来なかったからです。従って、アブラハムは、主に従おうとするときには、どうしてもよみがえりの力を経験しなければなりません。

私たちと同じように、アブラハムもまた、多くの過ちを通してこのことを学びました。三度、アブラハムは自分勝手に事を行なってしまったのですが、その結果、罪の中に陥ってしまいました。私たちが自分の力で何かをしようとするならばいつも、「よみがえりに基づいた信仰生活」を送ることが出来ず、罪の真ん中に入り込んでしまうのです。

最初の失敗は、創世記 12 章に記されています。旧約聖書になります。10 節から。
創世記 12 章 10 節から 20 節

さて、この地にはききんがあったので、アブラハムはエジプトのほうにしばらく滞在するために、下って行った。この地のききんは激しかったからである。彼はエジプトに近づき、そこにはいろいろとするとき、妻のサライに言った。「聞いておくれ。あなたが見目麗しい女だということを私は知っている。エジプト人は、あなたを見るようになると、この女は彼の妻だと言って、私を殺すが、あなたは生かしておくだろう。どうか、私の妹だと言ってくれ。そうすれば、あなたのおかげで私にも良くしてくれ、あなたのおかげで私は生きのびるだろう。」アブラムがエジプトには行って行くと、エジプト人は、その女が非常に美しいのを見た。パロの高官たちが彼女を見て、パロに彼女を推賞したので、彼女はパロの宮廷に召し入れられた。パロは彼女のために、アブラムによくしてやり、それでアブラムは羊の群れ、牛の群れ、ろば、それに男女の奴隷、雌ろば、らくだを所有するようになった。しかし、主はアブラムの妻サライのことで、パロと、その家をひどい災害で痛めつけた。そこでパロはアブラムを呼び

寄せて言った。「あなたは私にいったい何ということをしたのか。なぜ彼女があなたの妻であることを、告げなかったのか。なぜ彼女があなたの妹だと言ったのか。だから、私は彼女を私の妻として召し入れていた。しかし、さあ今、あなたの妻を連れて行きなさい。」パロはアブラムについて部下に命じた。彼らは彼を、彼の妻と、彼のすべての所有物とともに送り出した。

とあります。

アブラハムは少しの間、約束の地にいました。やがて飢饉がやって来た時、不安を感じるようになり、エジプトへと出て行きました。主を見上げる代わりに自分勝手なことをしてしまったのです。彼は「約束の地」を自分自身で見つけたのではなく、主の導きによるものでした。「私を養ってくださるのは主ご自身。今まで導いてくださった主であり、この大飢饉も私のせいではなく、主の責任によるものだ。今まで導いてくださった主ご自身だ」と、このような信仰を続けることができれば幸いでした。しかしアブラハムはこのような信仰の態度がとれなかったのです。彼は自分勝手なことをしてしまったのです。

外側を見るなら、アブラハムはより豊かになり、快適な生活を送っていました。しかし、内側を見ると、彼は妥協によって弱くなり、その結果、主は、彼が罪を悔い改めてカナン

の地に戻って来るまでは、彼を導くことがおできにならなかったのです。

「信仰の父」と呼ばれたアブラハムとは、こういう男でした。

第二の失敗は、創世記16章に書かれています。

主は、アブラハムに一人の子を約束なさいました。嘘を知らない主が、約束してくださいました。けれど、彼は考えました。「私たちは今や、主に全くすべてをゆだねることはできない。私たちにとっては主のなさることはあまりにも遅すぎて、助けとはならないから自分たちの力で何とかしなければならぬ」と思ったのです。結局、アブラハムは絶望してしまっただけです。

主は、アブラハムに「息子をお与えになる」ことを約束されましたが、その約束はなかなか成就しません。アブラハムは歳を取り、ついに八十五歳になって、その望みはほとんど無くなってしまいました。アブラハムはそれまで主とともに歩み、多くの幸を経験しました。しかし、今、息子を与えてくださるという主の約束は望みが無くなってきました。

人は絶望すると、いろいろな違った反応を示します。ある人は絶望状態に陥ると、諦めてしまいます。またある人は逃れるために自分で何かしようとします。アブラハムの場合にはそうでした。

アブラハムは絶望しました。妻サラは子を産みません。そこで妻サラは、召使い女の、名をハガルというエジプトの女をアブラハムの妾として与えました。ハガルはまもなく、アブラハムの子を産みました。これは何を意味しているのでしょうか。

アブラハムはその行ないによって、「主はできない。だから自分で事を行なおう」という、彼の間違った心を表わしています。アブラハムは、「主は望みの神ではない。私がやら

なければ、主は成し得ない」という気持ちになったのです。結局、アブラハムは主に対する絶望感に陥り、その時、アブラハムは主に拠り頼まず、自分で事を行ないました。その結果はどうだったのでしょうか。悪魔が勝利を得ました。現在も、悪魔は私たちの状態を見て、大いに喜ぶことがあります。

私たちは、「主はできない。主はこの状態を解決できない。だから自分でやろう」と、口でこそだれも言いませんが、実際の生活において、それを行なっている場合が往々にしてあるのではないのでしょうか。

アブラハムは何でもおできになる主を仰ぎ見ないで、自分で問題を解決しようと思ったのです。しかし、これは肉の思いです。即ち、私たちは徹頭徹尾主にゆだねることができません。主の時が来るまで待つのは、あまりにも時間がかかりすぎると。その結果、アブラハムは、エジプトの女ハガルと一緒に、子どもが産まれました。

アブラハムは、第一回目の失敗のあとエジプトを離れましたが、今また再びエジプトと結び付いてしまいました。なぜなら、ハガルはエジプトの女だったからです。そして、このことは今日に至るまで、一つの大きな悲劇の源となりました。それは、イスラエル人の何千年間もの歴史の上で、「敵」はハガルの子孫であるアラビア人であるからです。

第三の失敗は、創世記20章に書いてあります。

結局、アブラハムは、また自分を守るために嘘をついてしまったのです。自分で心配するか、主に頼るかのどちらかです。

イサクが生まれる前、アブラハムは、嘘をついて自分の妻を自分の妹だと言いました。アブラハムは不信仰のゆえに嘘をつきましたが、それは彼が用心深く振る舞おうとしたからです。しかし、彼の心配は全く根拠のないものでした。

アブラハムの失敗は、よみがえりに基づかない信仰生活はどのようなものであるか、また、どのような実を結ぶものであるかを私たちに示しています。しかし、それ以外の点では、アブラハムは「よみがえりに基づいた信仰生活」を送り、全く主に拠り頼んで、全てを主に捧げました。

私たちは、主の導きと主の助けが無ければ、全く無力な者であるということを知るようになり、その結果、本当に主に拠り頼んだ信仰生活を送っているのでしょうか。

アブラハムの祝福された生活の特徴は、主に対する全き拠り頼みです。

2. それから、「主の拒絶的な答えに対する了解」、あるいは、「主の否に対する了解」です。

アブラハムは、これを願ったり、思ったり、望んだりしましたが、それに対して主は、再三再四、「否」と言われました。この「否」という主のことばは、アブラハム自身の考えや目的の死を意味しました。しかし、その死に続いてよみがえりが成就されたのです。

このよみがえりの力は、ただ十字架を経験すること、即ち自己否定の結果としてのみ得られるのです。

この「否」という主のことばは、病気になったり、お金が無かったり、その他いろいろな困った状態を意味しますが、しかしそのような否定的な状態に対しても、「然り」という肯定的な返事をする事ができれば、祝福され、新しく生かされ、用いられるようになります。

アブラハムはこのことを何回も経験しました。そして、アブラハムは結局七回了解し、その都度自分自身の死を、即ち、自分自身の考えを否定することを学びました。それ以来アブラハムは、勝利から勝利への信仰生活を送ることができるようになったのです。

アブラハムの七つの経験について、考えたいと思います。

① 第一番目の経験は、次のようなものでした。創世記の11章31節です。

創世記 11章31節後半

彼らはカナン¹の地に行くために、カルデヤ人のウルからいっしょに出かけた。

とあります。

アブラハムは、多くの人と同じように、自分の利益やこの世の財産を求めるといふ自然の要求を持っていました。自分の故郷における安全と快適さは、アブラハムが好んだものでした。しかし主は、「否」とおっしゃり、別の所へ移ることを命令なさいました。アブラハムは、慣れ親しんだ故郷を離れなければなりませんでした。

私たちは、私たちの将来についてどのように考えているのでしょうか。もし、主が全てを捨てて別の所へ移るようにと私たちに命令なさるならば、私たちはどのような態度を取るのでしょうか。

② 第二番目の経験は、創世記の11章31節の後半に書いてあります。

31節後半

しかし、彼らはカラン²まで来て、そこに住みついた。

彼らはカナン¹の地まで行く予定だったのですが、その途中のカラン²まで来て、そこに住みついたとあります。アブラハムの父は、中途半端な事しかしませんでした。つまり、何かを始めても、それを完成まで続けられなかったのです。

多くの信者は、このアブラハムの父と同じようなことをしていないでしょうか。この世から引き出された者ですが、しかし、彼らは自分の財産や利益などのためにこの世の誘惑に負けて、中途半端な状態にとどまってしまうのです。

アブラハムの家族は、カラン²で非常に好ましい場所を見出し、そこで快適な生活をしました。実際、こんにちも多くの信者は妥協してしまったり、あれやこれやと心を動かしたりする適当な生活をします。それは快適な生活であるかもしれません。

けれど、主はそのようなアブラハムの快適な生活に対して、「否」とおっしゃり、アブラハムはそのみことばに従いました。

創世記 12章4節、5節

アブラムは主がお告げになったとおりに出かけた。ロトも彼といっしょに出かけた。アブラムがカランを出たときは、七十五歳であった。アブラムは妻のサライト、おいのロトと、彼らを得たすべての財産と、カランで加えられた人々を伴い、カナンの地に行こうとして出発した。こうして彼らはカナンの地にはいった。

とあります。

主は、私たちの生活に満足しておられるのでしょうか。私たちの生活は、妥協によって特徴づけられてはいないのでしょうか。

確かに、私たちは主にだけ仕えたいと思うのです。しかし、実際「心は燃えていても、肉体は弱い（マタイ伝26：41）」ということを経験し、そのため諦めてしまって、どうなっても仕方がないと思う信者が多いのではないのでしょうか。

けれども、ここにおいても主は、「否」とおっしゃいます。私たちが自分の自我を捨てて、すべてを主に明け渡すときに初めて、私たちは内面的、霊的に成長することができるのです。

③ 第三番目の経験は、次のようなものです。

アブラハムは、そこから出てカナンの地に着きましたが、妥協者であるアブラハムの父は、そこに着く前にカランの地で亡くなりました。

アブラハムは、そこで一つの選択の前に立たされました。即ち、彼はソドムとゴモラの周りの、実り豊かな土地を取るべきか、あるいは、それよりも実りの少ない地を取るべきかという二者択一です。アブラハムは、実り豊かな地域を見て、それが気に入りたいという気持ちを持っていたでしょう。アブラハムはロトよりも年上でしたから、選択の権利はアブラハムにあったわけです。アブラハムは、「主よ、私はどうしたらよいのでしょうか」と祈りました。主は、「否」とおっしゃり、アブラハムはそれに従いました。

この場合にも、アブラハムは自分自身の考えを大切にせず、主の導きに従ったのですが、結局、それは、結果的に見て正しい選択であったことが判明します。

私たちは自分の利益を取るのでしょうか。あるいは、「自分はどうなっても構わない。ただ、主の導きだけに従いたい」という態度を取るのでしょうか。そのどちらの道を選ぶかによって、私たちはよみがえりの力を体験するか、しないかが決まります。

創世記13章から二、三節読みます。

創世記 13章1節から12節

それで、アブラムは、エジプトを出て、ネゲブに上った。彼と、妻のサライト、すべての所有物と、ロトもいっしょであった。アブラムは家畜と銀と金と非常に富んでいた。彼はネゲブから旅を続けて、ベテルまで、すなわち、ベテルとアイの間に、以前天幕を張った所まで来た。そこは彼が最初に築いた祭壇の場所である。その所でアブラムは、主の御名によって祈った。アブラムといっしょに行ったロトもまた、羊の群れや牛の群れ、天幕を所有していた。その地は彼らがいっしょに住むのに十分で

はなかった。彼らの持ち物が多すぎたので、彼らがいっしょに住むことができなかったのである。そのうえ、アブラムの家畜の牧者たちとロトの家畜の牧者たちとの間に、争いが起こった。またそのころ、その地にはカナン人とペリジ人が住んでいた。そこで、アブラムはロトに言った。「どうか私とあなたとの間、また私の牧者たちとあなたの牧者たちとの間に、争いがないようにしてくれ。私たちは、親類同士なのだから。全地はあなたの前にあるではないか。私から別れてくれないか。もしあなたが左に行けば、私は右に行こう。もしあなたが右に行けば、私は左に行こう。」ロトが目を上げてヨルダンの低地全体を見渡すと、主がソドムとゴモラを滅ぼされる以前であったので、その地はツォアルのほうに至るまで、主の園のように、またエジプトの地のように、どこもよく潤っていた。それで、ロトはそのヨルダンの低地全体を選び取り、その後、東のほうに移動した。こうして彼らは互いに別れた。アブラムはカナンの地に住んだが、ロトは低地の町々に住んで、ソドムの近くまで天幕を張った。

とあります。ロトは、もちろん祈らないで、そのヨルダンの低地全体を選び取りました。

④ アブラハムの第四の経験は、次のようなものです。

アブラハムが敵に対する圧倒的な勝利のあとで戻って来たとき、ソドムの王はアブラハムに対して、贈り物によって影響を与えようとした。しかし、主は、「否」と言われたので、アブラハムはそれに従い、何一つ受け取ることをしませんでした。即ち、この世から認められることを意識して退けたのです。

創世記 14章22節、23節

しかし、アブラムはソドムの王に言った。「私は天と地を造られた方、いと高き神、主に誓う。糸一本でも、くつひも一本でも、あなたの所有物から私は何一つ取らない。それは、あなたが、『アブラムを富ませたのは私だ。』と言わないためだ。」

「この世の名誉は何もいらない。この世から認められることは必要ない」と。

これこそアブラハムの態度であり、初代教会の祝福された秘訣でもありました。こんにちしばしば見られることは、この世の手段で主に仕えようとしたり、この世から認められたいというような行ないです。ですから、そのような信者は、よみがえりの力を経験することができないのです。

⑤ 第五の経験は、次のようなものです。

主は、イシュマエルに対してはっきりと、「否」とおっしゃいました。

創世記 17章15節から22節

また、神はアブラハムに仰せられた。「あなたの妻サライのことだが、その名をサライと呼んではならない。その名はサラとなるからだ。わたしは彼女を祝福しよう。確かに、彼女によって、あなたにひとりの男の子を与えよう。わたしは彼女を祝福する。彼女は国々の母となり、国々の民の王たちが、彼女から出て来る。」アブラハムはひれ伏し、そして笑ったが、心の中で言った。「百歳の者に子どもが生まれようか。サラにしても、九十歳の女が子を産むことができようか。」そして、アブラハムは神

に申し上げた。「どうかイシュマエルが、あなたの御前で生きながらえますように。」すると神は仰せられた。「いや、あなたの妻サラが、あなたに男の子を産むのだ。あなたはその子をイサクと名づけなさい。わたしは彼とわたしの契約を立て、それを彼の後の子孫のために永遠の契約とする。イシュマエルについては、あなたの言うことを聞き入れた。確かに、わたしは彼を祝福し、彼の子孫をふやし、非常に多く増し加えよう。彼は十二人の族長たちを生む。わたしは彼を大いなる国民としよう。しかしわたしは、来年の今ごろサラがあなたに産むイサクと、わたしの契約を立てる。」神はアブラハムと語り終えられると、彼から離れて上られた。

イシュマエルは、肉の結果、即ち、自分の努力の結果として生まれた者です。それから十三年間、アブラハムは、主がイシュマエルを認めてくださるのではないかと思いました。今読みました17章18節で、アブラハムは神に祈って言いました。「どうかイシュマエルが、あなたの御前で生きながらえますように」と。

けれども、主は、「否」と仰せになりました。それは、私たち人間の肉の努力とは結び付かないのです。そのためにアブラハムは、結局、主の「否」というみことばを了解せざるを得ませんでした。アブラハムは、主に従ってイシュマエルを追放しました。イシュマエルに対して、はっきりとした態度を取ったのです。

⑥ 第六の経験は、次のようなものでした。

アブラハムは、主が決して代用品を了解なされないということを知っていました。主はアブラハムとサラに一人の息子を約束してくださいましたが、そのために、主は、人間の努力や助けを必要とはなさいません。主は奇蹟をなしてくださり、人間の目には全く不可能と思われたこと、即ち、アブラハムとサラに一人の息子が生まれるということを実現なさいました。

創世記 21章10節前半

「このはしためを、その子といっしょに追い出してください。」

とサラの口を通してアブラハムに命令なさいました。これもまた、再び主の「否」というご返事でした。

主の「否」というみことばは、常に「自我の死」を意味しています。アブラハムもまた、私たちと同じような人間でした。そのことは21章11節に記されています。

創世記 21章11節

このことは、自分の子に関することなので、アブラハムは、非常に悩んだ。

とあります。イシュマエルをのけ者にするというだけでなく、それだけでは十分ではなかったのです。彼は家族から追放されなければなりません。主は妥協に対して長く忍耐することがおできになりません。

アブラハムはまずウルを捨てて、次にカランを捨て、それから実り多いヨルダンの平野を捨て、そして、今や彼はイシュマエルをも追い出さなければならなかったのです。「分離」は、深刻な、耐え難いほどのものとなってきました。

しかし、それによってアブラハムは、信仰的、靈的に深められ、成長したのです。

⑦ 第七の経験は、次のようなものでした。

最後にもっと辛い分離がやって来ました。創世記の一番大切な章とは、22章なのではないでしょうか。

創世記 22章7節、8節

イサクは父アブラハムに話しかけて言った。「お父さん。」すると彼は、「何だ。イサク。」と答えた。イサクは尋ねた。「火とたきぎはありますが、全焼のいけにえのための羊は、どこにあるのですか。」アブラハムは答えた。「イサク。神ご自身が全焼のいけにえの羊を備えてくださるのだ。」こうしてふたりはいっしょに歩き続けた。

長い旅でした。彼らは三日間、一緒に歩いたのです。主はイサクに対して、「否」と仰せになりました。イサクは主によって与えられたものであり、それは本当に考えられない、信じられない奇蹟でした。

わが子イサクを縛って祭壇の上に置くこととは、アブラハムにとってどれほど辛いことだったのでしょうか。けれど、アブラハムはその備えをしました。彼は、主に「然り」と言いましたが、それは彼にとって最も高価な代価でした。

私たちは、そのような状態からどれほど離れているのでしょうか。

ローマ人への手紙 13章11節後半

あなたがたが眠りからさめるべき時刻がもう来ています。

今や私たちも眠りからさめるべき時、また、主イエス様によって用いられるべき時が来ています。けれど、このことは、自分自身に対して死ぬことによるのみ可能となります。

私たちもアブラハムと同じように、主の「否」に対して「然り」と答え、それを了解することができるようになれば本当に幸いです。

今まで私たちは、アブラハムの祝福された秘訣として、第一に、「主に対する全き抛り頼み」、第二に、「主の否に対する了解」を学んできました。

3. 最後に第三番目、「絶えず続く新しい成長」について考えて終わりたいと思います。

アブラハムの経験は何であったかと言いますと、アブラハムは毎回、主の「否」に対して、「然り」という態度を取りましたので、あふれるばかりの豊かな祝福を受けることができたのです。「自我の死」は、いつも「よみがえりの力」の新たな経験に私たちを導いてくれます。

そこで最後に、アブラハムが自我に死ぬことによってどのような祝福を受けたか、手短かに読んでみたいと思います。

① まず第一に、アブラハムは自分の故郷であるウルを離れる前に、主なる神からの祝福が約束されていました。そしてアブラハムは主に従順に従ったとき、主は偽らないお方であるということを経験的に知ることができたのです。

② 第二に、アブラハムが目的地の手前にあるカランの地を去る前に、主は、従順に対する豊かな祝福を約束してくださいました。それを通して、主は、アブラハムにご自身が真実であることを体験的に教えてくださり、アブラハムは豊かな祝福にあずかることが許されました。

③ 第三に、アブラハムがロトに土地の選択を任せるとき、そしてこの世的には大変な損失を被ったとき、主は次のように言われました。

創世記 13章14節、15節

ロトがアブラムと別れて後、主はアブラムに仰せられた。「さあ、目を上げて、あなたがいる所から北と南、東と西を見渡しなさい。わたしは、あなたが見渡しているこの地全部を、永久にあなたとあなたの子孫とに与えよう。」

アブラハムは主に従ったとき、この素晴らしい約束を与えられました。「私はどうでもよい」という態度を取ると、常に成長、拡張、豊かさが与えられます。

④ 第四に、アブラハムがこの世の賜物、ソドムの王の贈り物を断固として断った時、その時初めて、主は次のように仰せられました。

創世記 15章1節後半

「アブラムよ。恐れるな。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きい。」

ここで、「非常に」ということばが使われていますが、それは大切な意味を持っています。なぜなら、アブラハムはソドムの王からの贈り物を拒んだ時、天の王はアブラハムに非常に大きな報いを提供して下さったからです。

主のためにすべてを捨て、自分が認められることを少しも望まない人は、主ご自身によってあふれるばかりの豊かな恵みを与えられます。

創世記15章5節に記されているように、アブラハムは上を、即ち、天を見上げました。「上」あるいは「天」とは、豊かな報いを意味しています。なぜなら、まことの報いは常に上から与えられるものであるからです。

よみがえりに基づく信仰生活とは、あらゆる環境、あらゆる不可能なこと、あらゆる人間に対して超越している立場を意味しています。

創世記 15章5節後半

「天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。」さらに仰せられた。「あなたの子孫はこのようになる。」

この約束は、私たちにも当てはまります。

パウロは、コロサイ書3章2節に書いています。

コロサイ人への手紙 3章2節

あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。

地上のものを思わず、天にあるものを思うと豊かな祝福が与えられます。

- ⑤ 第五に、アブラハムがイシュマエルに対する神の否を受け入れ、そして、主なる神が自分の息子を必ず与えてくださると信じたとき、十三年後に、主はアブラハムに新たに啓示してくださいました。

創世記 17章2節後半

「わたしは、あなたをおびたしくふやそう。」

という約束が与えられたのです。

- ⑥ 第六に、アブラハムはイシュマエルを追放して、主なる神の側に立ったとき、17章6節の約束を与えられました。

創世記 17章6節

「わたしは、あなたの子孫をおびたしくふやし、あなたを幾つかの国民とする。あなたから、王たちが出て来よう。」

要求されることは、自分の力や努力に拠り頼むことをやめること、そして、自分の願いどおりに事が進まなくても主に信頼し、拠り頼むことです。そうすると、豊かな祝福が与えられます。

- ⑦ 最後に、アブラハムは自分のすべてであった息子イサクを犠牲に捧げることを良しとしたとき、その時から、最も実り多い信仰生活が始まるようになったということです。

アブラハムによって捧げられたイサクは、小羊なるイエス様を象徴するものでした。私たちは、イエス様が捧げられた犠牲のことを思い起こすことによって、自分自身を新たに、主に捧げようではありませんか。

- ・私たちの人生は、果たしてアブラハムの人生と同じようなものなのでしょうか。
- ・即ち、主に対する全き拠り頼みの人生なのでしょうか。
- ・また、主の拒絶的な答えに対する了解の人生なのでしょうか。
- ・そして、絶えず続く新しい信仰の人生なのでしょうか。

パウロの人生の特徴は、アブラハムの人生の特徴と全く同じでした。パウロは次のように言ったのです。

ピリピ人への手紙 3章10節、11節

私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、どうかして、死者の中からの復活に達したいのです。

そのよみがえりの力は、いかにして私たちの人生において有効なものとすることができるのでしょうか。それは、「イエス様の十字架」が、私たちの人生において本当の経験となることによって実現されます。

パウロは言いました。

ガラテヤ人への手紙 2章20節前半

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。

了